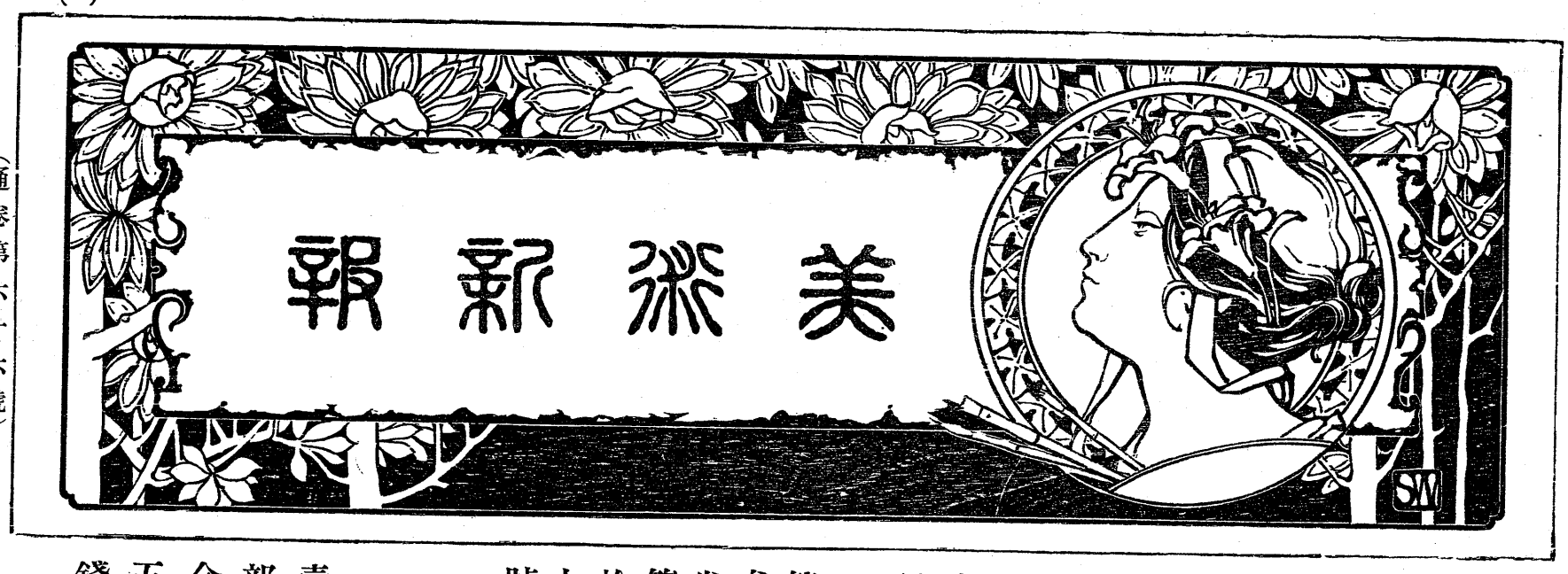
毎月二回(五日、二十日)發行
明治三十五年三月二十七日第三種郵便物認可
明治三十七年十一月廿五日發行



(通卷第六十六號)

明治三十七年十一月二十日　第參卷第拾七號　壹部金五錢

目次概要

三宅克巳氏の『水彩畫專門』と云ふ說を讀みて……京都、鹿子木孟郎……一、二
日本繪畫協會の今昔(承前)……鹽田力藏……二
あめりかだより(其一續)……在米、大村西崖……三
ヴアチカンとサン・マルコにあるフラ・アンゼリコの繪畫につき(續)……和田英作氏談……四
遼陽にての樂しき半日……石川欽一郎……五
泰西美術家略傳……五
從軍雜錄補遺……五
時報其他……六、七

戰畫
『遺せし女』……グリーン筆……一

(挿畫)
第二十五圖『心藝館』……聖路易博覽會彫像建築
第二十六圖『女神像』……同
第二十七圖『音樂』……同
第二十八圖『海王』……マルチニィ作
第二十九圖『勝女』……同
第三十圖『勢力』……同
憤り(三四會課題)……渡邊長男作
靜物(太平洋畫會研究會出品)……阿部胤作
油畫(同)……同
釣魚人物……松齋作
彫刻……加藤常一作
競技會出品……井菊野筆
寫眞『磯野吉雄氏』……

三宅克巳氏の『水彩畫專門』と云ふ說を讀みて

京都　鹿子木孟郎

余は思ひき、三宅氏は立派なる畫家たるべきを期するの人なることを。而して偶まその說を見て一驚を喫せり。氏の說く所は余が偶或其二なるものに對する辯護及び氏の所期する希望となり。余は今一言を呈して其反省を乞ふものなり。成程氏の謂はるゝ如く、日本畫家が日本畫の手法にのみ依賴せずして一歩進んで更に完全に近き畫法を追求する爲に洋畫に取らんとするは大に面白き現象なり。然も是を洋畫の基礎なるものに求めずして氏の曰はるゝ如く日本畫に近き水彩畫に求めんとする、是れ余が大に變てこに感じて一言せる所なり。三宅氏も自白せる如く水彩畫具は日本畫具に近しと、是れ大に然り、今日日本畫の缺點多くありと雖も、道具立ての上よりの缺點は色彩の不完全なることなり。次に知識よりの缺點は物を見るの目正しからざる事なり。乃ち解剖學、遠近法、陰影法等の知識に乏しき事是なり。而して是等の畫家が從來の手法に甘んせずして進取せんとするに色彩の不完全なる度に於て日本畫と相去る遠からざる水彩畫を撰ぶは夫等の鑑識未だ低劣にして、油畫(道具立ての上よりも今日に於て比較的具備せる)を解する能はざるに因せん。是れ色彩に於て缺乏せるを證するなり。次に知識の缺點に於て青年日本畫家は其缺點を自認せるもの甚だ少し。否三宅氏の如きも(かゝる說をなす以上は)是等青年日本畫家と同樣の人と云ふべし。青年日本畫家等の所見は唯だ洋畫(水彩畫?)の圖取りと濃淡の猿眞似をなすものなり。而して是等の人が其欲する圖取りと濃淡なるものゝ由りて來る所の根本を究めんとするもの實に皆無と云ふて可ならん。是れ其作も其所見も變てこなる所以なり。青年日本畫家中に誰か洋畫の根底なる人體寫生を究めんとするものあるや、誰か解剖學を學ばんとするものありや、誰か遠近法、陰影法を解せんとするものありや。

三宅氏の如き洋畫家と目せらる人にして、其說低劣此の如く、洋畫の骨髓の何れにあるやを知らずして漠然水彩畫專門と呼ばるゝに至りては、余其不明に驚かざるを得ず。

前にいへる青年日本畫家なる人々の見識は何か新奇を得んと欲して之を求めつゝあるなり、而して人あり、其如何なる缺點を補はん爲に斯くするかと問へば、恐くは明白に從來の日本畫に斯く斯くの缺點ありと答ふるを得る人少からん。余は曰はんとす、諸氏等は只だ何か變りたるものを畫きて古人より一見識を開きたりと云ふ空漠なる名譽を夢みつゝあるならん。斯の如き畫家諸氏なるを以て、偶まに日本畫と繪具に於て相近き水彩畫なる

『遺せし女』(英國ラヴェスタ一美術館藏)　グリーン筆
(七十二吋=五十一吋)

戰の門出よ。半島戰爭として知られし長き〳〵戰の爲に出で立つ英國聯隊の、悲なしめるうから、新に婚せし女、驚ける愛人に船迄送らるゝなり。樂匠のかなでの今は胸の痛みを靜め難なし。さはれ兵士の面には希望輝き、勇ましの氣のいとも振へる軀ては今跡に遺せる愛するものに、安けく歸り來んとこそ願へれ。

もの、を學びたし、と云ふに期するならん。是等の人が是等の見識を以て進取せんとする其の正鵠を過まてるを警しめずして可ならんや。

由來洋畫なるもの其根底は之を人體の寫生となす。之を補ふに解剖學の知識と遠近法、陰影法等の知識を以てす。是れ洋畫の基礎なり、是れ文藝復興期以後の諸大家が公認せる基礎にして今日歐洲各國が畫學生を督勵して之を學ばしめ、而して後人物畫家は勿論風景畫家に動物畫家に花卉、器物畫家に各々其の向ふ所に向はしむるなり。而して余は此人體寫生なるものが如何に他の風景畫等と關係あるかに付き諸氏に一言せん。老人の體格は輪廓に於て峻山の如し、婦人の體格は靜かなる大海の如し。色彩に於て老人は秋の野の如く、婦人は春の野の如し。人體寫生を學んで、而して後に風景に移る、その關係此の如く他の類に及ぼして皆然り。歐洲の各家が其向ふ所に成効せる、實に其原づく所は嚴格なる人體寫生の基礎あるが爲なり。コロー、ミレー等の風景諸家の如何に人體寫生に研鑽を積めるを見ても首肯せざるを得ざらん。三宅氏の如き徒らに基礎なき水彩風景畫を作るを止め、少しく此點に學ぶ所あれ。

次に水彩畫の到底道具立ての上に於て油畫に及ばざる事に就て其例を上げんか、水彩畫を專門とせんとする畫家は恰も日本畫具を以て西歐の畫を模寫し若くは西歐の畫家が成せる如き色彩を顯はさんとして無駄骨折ると其愚遠からず。由來美は一體なり。自個が顯はさんとする形體と色彩の美は之を顯はすに最も便利なる繪具を用ゆるを至當とす。若し油畫の名畫を見て其形體色彩の美を顯はしたるの妙なるに感ぜば、自己も亦油畫具を用ゆべし。之を他の畫具を用ゐて顯はさんとする無理の注文なり、よし之を能くし得たりとするも美を顯はしたる美術品として輕重なきにあらずや、例へば若し單に米國に航するを目的とする兩人あり、甲は瀛船を用ゐ、乙は乘るべき瀛船あるに拘はらず、一帆船を用ゐんとす。甲何ぞ乙の愚を笑はざるを得んや。彼の下村觀山氏の如き之に類するにはあらずや。三宅氏も亦水彩畫を以て油畫に對せんとす、亦此類か。

油繪具が水彩繪具に比して畫家の美想を發揮するに便なる、古來西歐幾多の大家が油繪具を以て常に其不朽の作品を作る所以なり。余は未だ過去幾百年の歴史に於て畫家不朽の作品たる水彩畫なるものあるを聞かず。英のターナーは時に水彩畫を畫けり、然も其遺作として有名なる作品は皆油繪具に依れり。宜なるかな、其英國畫堂中氏の油畫が一室を占領して光彩を放ち、其水彩は陛下の一小室に「氏も亦時に水彩畫を畫けりと曰はんが如くに」參考として陳列せらるゝことや。佛國のサロン館内に見よ、堂々たる主要の地を領して光彩を放てる畫は皆畫家が油畫具に依りて畫けるものなることを。ターナーの如きは英國が以て誇りとするの畫家なり、而して其人が一心の全力を注きしものは油畫具を用ゐたり。佛のミレー然り、コロー然り、文藝復興以來の諸大家伊に佛に獨に英に西に皆油畫ならざるはなし。余はラフエル、ミケランヂ、ベラスクエスの水彩畫を知らず、只現今（恐くは夫々の時代にも）佛英米等の諸國に水彩畫をなすの畫家あるを知れりと雖も、未だ其國を代表するが如き大家に水彩畫具を油畫具に勝れる道具立てとして使用せる人あるを聞かず、乃至は其國に畫家として相當の位地を有せるものに水彩畫專門の人あるを見ず、只時に商店畫舗の如き處、無名の作家が水彩畫の展覽會等を開けるを見るも、作品の見るべきもの少し。聞く是等の會出品人の過半は素人の慰み半分の事業に加ふるに、畫家として餘りに成効せざる人の水彩畫に一生を送らんが爲に專作せる諸氏の一團なりとかや。

知らず三宅氏は歐洲幾百年の歴史を無視し、彼の歴代の大家連が見たる見識を破却して其一心を投じて畫かんとする畫に水彩畫具を用ゐんと欲するか。將た自ら大成する能はざるを認めて、一等下りたる水彩畫專門家となりて、一生を送らんと欲せらるゝか、余は此の如き畫家が日本に輩出するを願はず、氏以て如何となす。

斯くいへば大體水彩畫なるものが油畫に比し不完全のものにして、立派なる畫家たらんことを期して進まんとするもの〻專修するに價せざる事を知らるゝならん。併し余の如きものゝ雖も、時に水彩を用ゐざることなきにあらず、そは折に油繪道具を携帶するに差支ある旅行の時の如き携帶に便なる水彩具を携ふることあるなり。歐洲大家の時に水彩畫の小畫あるは矢張斯の如き場合に作りたるもの多きにあるならん。

次に青年進取の日本畫家諸氏よ、諸氏が一大缺點は前にも言へる如く形體の不完全にして物を正しく見るの眼なき事なり。之れを正さんには解剖を學んで人體の寫生をなすこと第一の急務なり。（動物畫を畫かんとする人の如きも人體を學べば其目的を達すること難からざるに近し。そは恰も言語學者のラテン語を學修すると同じく英佛獨語の研究を輕易ならしめん）次に遠近法陰影法を學ばれよ、こは人體寫生の内に自ら解すべき點もあらん。之に加ふるに是等の課目を暫し專攻するの要あり。是れ諸氏が缺點を補ふの大要點なり。此の如くして形體を正しくし加ふるに諸氏が多年修養せる筆力を應用せられよ。日本の諸家が悉く油畫家となるを希はす、寧ろ從來の日本繪畫の一新面を開かるゝ人々あるを希望して止まざるものなり。

次に素人として清暇を水彩畫に費さるゝ人の益々多からんことを希ふ。これやがて深遠なる乃ち洋畫なるものゝ趣味を解するの階梯たるべければなり。

日本繪畫協會の今昔

（承前）

鹽田力藏

勢ひ斯くの如くなれば、身中に虫を藏せる病獅同然なる美術院と一般會員との有形無形の損害は歳月かけて實に莫大たりしなり。故を以て右兩會は若干月續ける後、何時とはなしに衰弱して、遂に自滅に歸したりしも、上下内外交〻私利逸樂の爭奪機關としては、蓋し當然の運命たりしものとす。併し兎もかくも右兩會の存在中は、互評會には本協會の有力者を含み、研究會には本協會の一般會員を含み居たれば、假りに之れを本協會の月次會とも見做すに足るものありき。然るに其後は此兩會すらも全滅に歸せしより、復た内外の連絡を維持するの途なく、中にも美術院と本協會との鎖鑰は最も糢糊の裏に陷りたれば、他日天下に對して共進會の開催に臨み、其間の伏線を設くるの急要なるより、即ち玆に二十日會を假設し、姑鳩ながらも一般藝術家の研究に便ずる傍ら、兼ねて相互間の懇親を篤くせんと欲したり。幸ひにして江湖有志者の同情を得て、毎月百人以上二百人内外の來會を見るは、誠に意外の盛況にして、此盛況は少くとも他日進運の根本たるべきを信ぜんと欲す。

然るに此二十日會に於てすらも、美術院の會計書記たる高瀨典曠は、會場の入口に繩張りをなして僅か五錢の會費徴收のために苛陋の手續を加へんとするより、先づ此等の惡弊を豫防するの急に迫られ、取敢へず各委員を選擧せしものなるが、中にも會計委員は畫家連の不得意なると、右高瀨の私心に對する氣兼ねとに由り、數箇月を閲して永く整理に就かざるは誠に歎息すべしとす。殊に甚しきは本協會の會費前納者よりは右二十日會費五錢を別に徴收せざる筈なりしに、高瀨は其前納濟を無收入に詐りて報告せるより、再應同會の會計委員をして反省せしめしも、數箇月後に至り强硬なる壓迫を受くるまでは、公然訂正さへもせずに過ぎたりき。其他大小の私事は平生の事にて、而かも本會運命の其掌中に左右せらるゝ所なりとす。

次に本協會々費の徴收に就きても、最初より其收支を發表せざる程なれば、其金圓は何等の費途に消用せしや、固より穿鑿の外なれども、先づ近年は書記の給料及び雜誌料等に充つる筈なりき。然るに右協會書記は平生全く美術院の雜務に從事し、會務の消長に就きては曾て何人も監視するものなし。殊に美術院には事務上の組織責任なく、分擔も引繼もなくして、隨時多方面に奔走するものなれば、權利ありて義務なく、人々互ひに意外の私利あるを知るのみ。故に同會の機關として、雜誌『日本美術』の發行事務を管掌するに當りても、曾て經濟上の責任に任ずることなく、一方には、會計書記は不思議なる小活版所と結托して、不自由にして遲く拙く、紙代組代刷代製本代とも一切高直なるものに、强ひて雜誌の印刷を請負はせ、平生永く編輯部をして非常なる煩累に困頓せしめしが上に、其印刷部數等を調査することもなく、甚しきは特別刊行の第二十四號のみにても一擧忽ち千三百許部の殘本を生ぜしめ、其まゝ之れを厄介視して放棄するが如き、誠に意外の放埒を續行し遂に通計一萬二千册の殘本を不規則的に生ずるに及べり。又た賣捌所の方面をも永年不問に放任し、恰も頂戴物にてもあるが如く、不時到來の賣揚金を喜ぶのみにして、曾て勘定の要を知覺せることなければ、其卸賣に對する割引格と實費との關係の如きは固より問題外なりとす。故に或る時は三箇月間も賣揚代金を收納することなく、而して編輯部及び印刷所へも、其儘三箇月の支拂停止を强ひて怪しむことなし。然るに一方には本會會員の會費徴收の如き、時々の集金人の手加減次第なれば、或は不人情の苛陋に陷り、或は無制限の放漫に流れ、曾て其間に一定の律規あることなかりき。

是より先、雜誌改良の機會に迫らるゝや久しかりしも、本會々費との權衡もありて、規則改正の上ならでは、雜誌改良の計劃立ち難く、同編輯部は久しく忍び難き苦悶の下に困頓せしが、昨春纔かに岡倉副會頭の同意を得るに及び、迅速に會費增加の決行となり、其三月十六日岡倉氏自ら此通知書を起草し、之れが印刷日數を見込みて同十八日發表の事とし、其日付さへも書込みて會計書記に渡されたりしを、高瀨會計これを一見すれば、其末文に、從來の未納會費は特別の相談に應ずる旨ありて、即ち新會費を勵行するに付き、舊會費は自然不問に附せらるべき暗示なるに驚き、斯くては九十許人の未納會費四十餘圓を損失するの恐れありとて、同人竊かに副會頭の通知を抑留し、且つ此通知の旨とは正反對に其間頻りに集金人を馳せて未納金を督促する中、早くも翌四月の四五日頃となり、同月一日より右改正を實施すべき期限は既に通過し、同月十日限り納金なきに於ては、會員は自然滯納處分を受くべき間際に及び、内部より再應の督促あるに已むなく、高瀨も始めて右の通知を發せしが、其後四五日中には早くも期限の盡きたる次第なれば、會員たるものは右期限を半ば經過して始めて、會費增加、三箇月分前納、集金人廢止の三件に狼狽する間もなく、僅々四五日後の同十日を過ぎて直ちに雜誌の發送止めに遭ひしかば、同誌上に改正規則の正文あるも一見の機なき筈なるに、其後一回も會費の督促だになく、更に新規則の通知もなくして、無斷の儘に會員の資格を消滅せしめたり。此時會員數は總計二百六七十名より九十許名に下り、其餘の三分の二は一擊の下に度外視され了りたるなり。

然るに院の會計書記及び協會書記等は、當時編輯部より再應の照會あるにも拘はらず、期限を過ぎても雜誌部數の減少見込を申込まざるより、前例に從ひ印刷すべきの通告を受けて、其儘に捨て置きつゝ、一方には右の如き發送止めを盲行せしより、百數十部の特別刊行は會費の節約ともならずして、空しく發送止めの怨聲を内外に博する丈となり了れり。書記等の專横妄斷は毎々此類なるにも拘はず其非行を改めしむること能はず。殊に昨春の如きは、岡倉氏自ら劍持幹事を余の面前に招き、高瀨の會計事務を取揚ぐべき直命を下せしにも拘はらず、右兩名のもの遂に此命に服從することなく、同氏も亦た何故か其儘に放置したるは、要するに此三人の間に何か公言し難き關係上の弱點ある者と斷言せざるを得ず、中にも高瀨等は既に會費を徴收せしこと六箇月にして、其間全く之れを目的たる雜誌改良の途に拂込むことなく、全く說明すべからざる他用に消費し去りて、復た辨償する能はざるに及べり。

右の如き高瀨等の暴行に由り、全會員の激興一方ならず、即ち會員の大多數は期せずして無斷脫會の姿となり、其最も美術院と重要の關係ある大畫伯某翁の令息の如きさへ、此無斷除名に均しき所作を憤り、夫より枝葉の紛紜も聞ゆるなど最はや此儘には捨置き難き有樣なるより、岡倉副會頭も遂に大鋭斷を下して會費全廢の一擧に及べり。是れ實に全會瘠滅と殆ど同然にして、今は只だ其會名のみを存し、之れに鹽田力藏の副會頭事務取扱を置きて、起死回生の手腕を揮はしめんとするも、今や情弊纏綿、余が一刀兩斷の快擧あるを許さず。而して是れ余が敢て弱きにあらず、本會と美術院と岡倉氏とは事實上に於ける一塊團にして、此際急に高瀨等が不逞を處分するに於ては、他方面に於て同院の○○修繕の經費上に於ける不埒などと共に、擧げて之れを局外の名譽責任者たる雅邦翁の一身に塗り着けて、意外の珍事に至らしむるの恐れあればなり。岡倉氏たる